

九大発ベンチャー 有機EL市場へ

「有機EL」の材料開発は、世界中の大学や民間企業が取り組んでいる。だが、第3世代のコアになる特許は九大が持っている」九大の有機EL研究を率いる工学研究院の安達千波矢教授は、こう自信を見せた。

有機ELディスプレーは、電圧をかけると発光する有機物質を使う技術。物質そのものが光ることから、バックライトが必要で、より薄く作ることができる。

ただ、実用化した第2世代までは、イリジウムなどを押しながら、巨額投資に踏み切ったサムスン電子が、有機ELパネルでは9割前後の圧倒的なシェアを握つという統計もある。

安達氏らの研究チームは、レアメタルを使わない発光に成功し、特許を取得了。材料原価は、イリジウムを使った場合の10分の1以下ですむという。

九大は関連技術を合わせて50余りの特許を、ベンチャーエンタープライズ「Kyulux（キューラックス）」（福岡市西区）に移管する契約を25日までに結んだ。同社はこの特許を使い、発光材

要が拡大する「有機EL」に関して、同大学の技術を活用したベンチャーエンタープライズが、平成30年の市場進出を目指すと発表した。有機ELディスプレーは薄く、曲げることも可能で、さまざまな応用が期待されるが、世界市場は韓国企業に席巻されている。九大発ベンチャーは高性能と低成本を両立させた第3世代技術で成長を目指す。

(高瀬真由子)

高性能・低成本 第3世代技術

料の製造や販売を、独占して行える。

資金面での支援も進む。

西日本シティ銀行などが出資するベンチャーファンド

「QBキャピタル」や、国

立研究開発法人「科学技術振興機構（JST）」など

から、計15億円を得るめど

が立ったという。

九大が視野に入れるのは、平成30（2018）年

に米アップルが発売する予定のスマートフォンだ。ディスプレーに有機ELを探用するとみられている。

「アップルの製品に、わ

有機EL（エレクトロ・ルミネッセンス）薄い膜状にした有機物質に電圧をかけ、発光させる技術。1950年代に基盤研究が始まり、90年代以降、ディスプレーとして実用化が始まった。液晶と違いバックライトなど光源が不要なことから、より薄いディスプレーが可能で、消費電力もない。

ディスプレー需要拡大 世界首位のサムスンに挑戦



第3世代有機ELの実用化に向けて連携する九州大の安達千波矢教授（右から3番目）や行政関係者ら

れわれの技術が使われる」とを想定している。知財を武器に優位に立つ

キューラックス代表取締役CEO（最高技術責任者）の安達淳治氏は、こう語った。

「大学と民間企業がともに研究すれば、最先端技術をいち早く商品化できる」

思いは一致し、20年、工

業研究院のある九大伊都キャンパス近くに、大学や企

業関係者が集う「産学連携

交流センター」を設置し

た。

「大学と民間企業がともに研究すれば、最先端技術をいち早く商品化できる」

思いは一致し、20年、工

業研究院のある九大伊都キャンパス近くに、大学や企

業関係者が集う「産学連携

交流センター」を設置し

た。

「大学と民間企業がともに研究すれば、最先端技術をいち早く商品化できる」

思いは一致し、20年、工

業研究院のある九大伊都キャンパス近くに、大学や企

業関係者が集う「産学連携

交流センター」を設置し

た。

2018年の有機EL市場は、11年の7倍に達するとの試算もある。

九大の技術が注目される以前から、福岡市は支援の方策を探っていた。

平成17年ごろ、市の産業支援の担当者は、安達（千波矢）教授と意見交換を重ねた。

「大学と民間企業がともに研究すれば、最先端技術をいち早く商品化できる」

思いは一致し、20年、工業研究院のある九大伊都キャンパス近くに、大学や企業関係者が集う「産学連携交流センター」を設置した。

21年、安達教授は内閣府の最先端研究開発支援プログラム（FIRST）の対象に選ばれた。560件以上の申請から選定された背景に、福岡市の事務的な支援があった。

「九大が誇る特許を武器に、新時代を開いてほしい。成長性のある企業とのマッチングや規制緩和など、今後も市としてできる支援をする」

高島宗一郎市長も、こう期待をにじませた。

伊都キャンパス周辺は、福岡県や九大が運用する「有機光エレクトロニクス実用化開発センター」もあり、国内有機EL研究の拠点となっている。

安達教授は「伊都キャンパス周辺を、最先端の企業や人が集まるシリコンバレーのようにしたい」と語った。